

英国における日本研究資料発展の歴史

——特に近代日本語図書館コレクションの設立について

小山 騰 (ケンブリッジ大学図書館)
Koyama Noboru

日本研究資料

日本研究資料を定義することは困難であるが、仮りに日本からの書籍、逐次刊行物、新聞、オンライン・サービス、美術品そして骨董品を主要な日本研究資料として数え上げることができる。それらはさらに情報および文化物という二つの有力な様相に従い二つのグループに分けることができる。情報という様相は情報を伝達するのに日本語が関与するので、言語という様相としても表現することもできる。情報または言語という様相に関しては、書籍、逐次刊行物、新聞そしてオンライン・サービスなどは情報または言語指向資料であり、そして、文化物という様相については、美術品、骨董品そして絵入り本などの書籍は文化物または文化物を指向する資料と見なすことができる。日本の日本文化物のヨーロッパへの流入は主にヨーロッパの「日本趣味」の流行に基礎を置いていた。歴史的に見ると、これらの資料の日本からヨーロッパへの流れは、文化物から情報または言語指向資料中心へと変遷したのである。この文化物より情報または言語指向資料への変遷は、日欧関係の発展と、これらの資料をもたらした新しい媒体の発達に依るものである。多分、第一次世界大戦と第二次世界大戦の戦間期を通じて情報または言語指向資料が徐々に文化物よりも顕著になったのである。しかし、日本研究のための主要資料である日本語の図書館のコレクションが本格的にヨーロッパで開始されるのは第二次世界大戦以後のことである。

ヨーロッパからこの会議に参加している二名の筆者の同僚がドイツにおける図書館資料そしてヨーロッパにおける博物館の資料について報告するので、筆者は英国における日本研究資料、特に主要な資料である近代日本語図書館コレクションに焦点を当ててみたい。

英国における日本語コレクション

英国における近代日本語図書館コレクションの発展は、英国の大学における日本研究の発展と密接に関係している。大学レベルでの日本研究には近代日本語図書館コレクションが必要である。英国における日本研究の発展は、第二次世界大戦後日本研究について大学に勧告と補助金をもたらした三つの報告により次の三段階に分けることができる。それらの報告は Scarbrough 報告 (1947)、Hayter 報告 (1961) そして Parker 報告 (1986) と呼ばれ、それぞれそれらの報告を取りまとめた委員会の議長の名前を報告の頭に冠している。英国の近代日本語図書館コレクションについては、日本研究の歴史と同じように、広く Scarbrough 報告、Hayter 報告、Parker 報告の展開に沿い、戦後から記述を開始することができる。さて、現在、英国には実質的な日本語

コレクションを所蔵する図書館が五つある。それらは SOAS 図書館 (ロンドン大学)、ケンブリッジ大学図書館、英国図書館 (BL) 東洋インド省コレクションズ、ボードリアン日本図書館 (オックスフォード大学) そしてシェフィールド大学東アジア研究図書館である。それらの五つの図書館は規模とサービスにより三つのグループに分けることができる。SOAS とケンブリッジは最初のグループに属し、それらの日本語コレクションは一番大きく、両図書館共開架式であり、日本語の書籍は館外に借り出すことができる。ケンブリッジ大学図書館の場合、約80,000冊の日本語書籍に加えて、国立国会図書館で所蔵している明治期刊行物(約170,000冊)をすべてマイクロ・フィルムで所蔵している。BL とオックスフォードは第二のグループに属し、それらの日本語コレクションは SOAS とケンブリッジに続いて大きなコレクションであるが、それらの日本語の書籍は貸し出しすることができない。また、BL は閉架式の図書館であり、オックスフォードの場合も利用者は移動書架により直接書籍に手を触れることができるが、書籍は SOAS やケンブリッジの場合のように主題により配架されてはいない。シェフィールドは第三番目のグループに属する。シェフィールドの日本語コレクションは他の四つの図書館に比べてその規模が小さい。後で述べるように、SOAS とケンブリッジの近代日本語コレクションは Scarbrough 報告により発達し、B. L. とオックスフォードの日本語コレクションは1950年代の後半に始まり、シェフィールドの日本語コレクションは Hayter 報告により創設された。いくつかの大学が Parker 報告 (1986) の趣旨に従い、1980年代に日本研究を開始した。スターリング大学、エジンバラ大学、ニューカッスル大学、エセックス大学、ウェールズ大学などがそれに当たる。それらの大学の日本語コレクションは今のところ非常に小さい。一般的に言って、日本語コレクションの累積の期間の長さがその大きさを表すと考えることができる。また、実際に英国の近代日本語コレクションの大きさはほぼ累積期間の長さに対応している。英国の近代日本語コレクションの図書館間における規模および古さの順序は以下のものであり、蔵書規模と蔵書の古さによるグループ分けに対応している。第一グループ (Scarbrough 報告) : SOAS とケンブリッジ、第二グループ : BL とオックスフォード、第三グループ (Hayter 報告) : シェフィールド、第四グループ (Parker 報告) : スターリング、エジンバラ、ニューカッスル、エセックス、ウェールズなど。そこで、次に、近代日本語コレクションの発展の歴史の中の早期の部分、すなわち、SOAS とケンブリッジの日本語コレクションが確立された部分を詳しく述べてみたい。なぜならば、そこがまさしく英国における近代日本語コレクションの基礎の部分に相当するからである。

戦時中接收された日本語書籍

後述するように、SOAS とケンブリッジは Scarbrough 報告によりそれぞれの近代日本語コレクションを発展させた。しかしながら、Scarbrough 報告の勧告により実際に大学補助金委員会 (U. G. C.) から日本語書籍購入のための補助金が1949年以降に下付される前に、ケンブリッジそして多分 SOAS も、Scarbrough 委員会の調査により戦後に東洋学が急激に拡大されることを予想して、戦後直ちに日本語の書籍を熱心に捜し始めた。しかし、日本と英国の間の国交が回復する以前には日本語書籍を直接日本から購入するのは大変困難であった。そこで、ケンブリッジや SOAS などの図書館は、英国を含む日本以外の地域から日本語の書籍を入手することを考慮した。それがなぜケンブリッジや SOAS が戦時中敵国財産として接收された日本語書籍に注目

したかという理由である。たとえば、ケンブリッジ大学図書館の日本語と中国語のコレクションの拡大発展に尽力した Haloun 教授は、1946年 2 月 8 日付で英国外務省の C. H. Noton 氏にケンブリッジの日本語コレクションの状況を説明しながら、ベルリン日本大使館の図書館について次のような問い合わせの手紙を出している。

「私は、最近ベルリンを訪問した『大公報』の代表者である簫乾氏より日本大使館のすばらしい図書館はまだそのままになっていると告げられた。大使館の建物は英国管轄地区にある。それらの書籍をケンブリッジ大学のために入手することは可能でしょうか。当大学の東洋言語学部の学部委員会は二年前に日本学科を創設することを勧告し、そして近い将来日本学の講師が任命される予定になっている。ケンブリッジ大学図書館はおそらくこの国では一番大きな日本語書籍のコレクションを所蔵している。しかしながら、特別の事情により、そのコレクションは購入された時の状態のままになっており、ほとんど現代の書籍が欠けている。一方、現代の書籍を日本から直接購入することは実質的には不可能のことと思われる。明らかに、ベルリン日本大使館の図書館が我々の必要としているものにぴったりであり、また同時に、ケンブリッジのために入手していただければ有効な活用にもなるでしょう。」

Haloun 教授が手紙を出している宛先人は敵国戦時出版物委員会（その簡略名は EPCOM）の議長である。EPCOM は1945年 8 月にドイツの出版物を入手するため英国情報目的小委員会（BIOS）により設置された。BIOS は連合軍の前進にともない入手できるようになった情報資料を利用するために英国外務省内に設置された。ケンブリッジ大学図書館評議委員会の委員でもあるケンブリッジ大学の Ellis Minns 教授も、同じ趣旨の手紙を書き、英国外務省にベルリン日本大使館の図書館をケンブリッジ大学図書館のために確保することが可能かどうか尋ねている。これらのケンブリッジからの要請にもかかわらず、ベルリン日本大使館図書館の日本語資料はケンブリッジのものとはならず、最終的には戦時中ヨーロッパで接収された他の日本語資料と共に SOAS に送られた。多分、SOAS の特別な役割や存在が理由で、SOAS がヨーロッパなどで接収された日本語資料の主要な受領機関になったと思われる。

では、戦時中英国で敵国財産として接収された日本の資料ではどうであろうか。ケンブリッジ大学図書館長である Scholfield 氏が1947年 1 月に EPCOM を通して獲得されたドイツの資料を選書するため HMSO（英国政府出版局）の倉庫に出かけた時、日本語の書籍も見せられた。そこで、ケンブリッジ大学は日本語資料選書のため Haloun 教授を HMSO に派遣した。そして、ケンブリッジ大学図書館は日本の外務省の文書を含む113点の資料を HMSO より購入した。日本の外務省の資料というのはロンドン日本大使館で所蔵していたものである。それらの113点の資料の値段はたった £10 であった。ボードリアン図書館（オックスフォード大学）もまた同じ1947年にロンドンの日本大使館にあった日本の外務省の記録を HMSO から購入している。HMSO の記録によると、SOAS、大英博物館図書館、ボードリアン図書館はそれぞれ £40、£22、£25 に相当する日本大使館の資料を購入し、そしてケンブリッジは £10 に相当する資料を購入したのである。ケンブリッジが HMSO から購入した113点の資料は英国で接収された日本の資料の一部である。英国で接収された日本の資料はしばしば旧日本大使館の書籍として記述されているが、英国にあった他の日本の団体などの書籍も含まれていた。それらの内のいくつかの資料、特に英語の資料は、1952年のサン・フランシスコ条約が発効する前にすでに HMSO から売りに

出されていた。1947年に、£1,092以上の書籍の売り上げがHMSOより報告されている。多分、売られたものの大部分は英語の資料であろう。HMSOは旧日本大使館の書籍の30%は日本語の資料であると推定している。HMSOは、1,979点の日本語の書籍と約2,000点のパンフレットと日本語のペーパー・バックの書籍があると報告している。多分、それらの日本語の書籍は、ケンブリッジなどが購入したもの以外、ほとんどHMSOからは売られなかったのではないだろうか。そして、多分、売れ残った日本語の資料は最終的にはヨーロッパで接收された資料と同じようにSOASに送られたのであろう。

SOASの1952/53年の年報によると、ヨーロッパ各地の日本大使館および領事館にあった2,000点以上の日本語の書籍がSOASに寄贈され、またSOASで必要がないと見なした数千冊の書籍が他の図書館に寄贈された。ケンブリッジはたった53冊のみ寄贈図書としてSOASから受け取った。この時期になると、もうケンブリッジは接收された日本語書籍に興味を失ったように思われる。なぜならば、後で述べるように、ケンブリッジは1949年と1950年にScarborough報告の補助金により大量の日本語書籍を日本から直接購入することができたからである。ケンブリッジが日本語の書籍を購入するため人を日本に派遣する前には、まだケンブリッジは戦時中に接收された日本語書籍に興味を持っていた。たとえば、ケンブリッジは1949年にハワイ大学より約330冊の日本語の書籍を購入しており、それらの内の多くの書籍が戦争中太平洋地域で接收された日本語の書籍であった。ところで、戦時中などに、英国とヨーロッパで接收された8千冊以上の日本語の書籍がSOASの極東学部に集められ、そこに預けられていた。多分、ケンブリッジが入手することができなかったドイツで接收された日本語書籍も後でそれらのSOASの資料に付け加えられたのであろう。1952年に日本がサン・フランシスコ条約により正式に戦時中接收された財産を取り戻す権利を放棄したので、SOASはそれらの日本語資料を公式に認知し、その内の2,000点をSOASの資料として受け取り、それらの書籍に在ロンドン日本大使館よりの寄贈というラベルを貼り付けたのである。そして、残りの数千冊の書籍は他の図書館に寄贈された。多分、それでも引き取り手のなかった資料はSOAS出入りの古書店に売られ、現在でもその古書店の湿った地下の物置に行くと、大使館の蔵書印などが付いた書籍を見つけることができる。前に述べたように、1949年以前にはSOASはたった3,000冊の日本語の書籍を所蔵していたにすぎなかった。おそらく、接收された2,000冊余の日本語の書籍はその3,000冊の中には含まれていなかったであろう。最後に、これらの接收された2,000冊の日本語書籍の役割は何であったのであろうかと考えてみたい。SOASの図書館のリーフレットは次のようにはその役割をはっきりと指摘している。「1939-45年戦争の後、ヨーロッパにあった旧日本大使館および領事館に所蔵されていた大量の書籍が当図書館に寄贈された。これは多分当図書館の日本語コレクションへの最初の重要な資料の追加である。というのは、それらの資料は日本の外交政策や海外活動に関係する多くの機密資料を含んでいたからである」。そこで、SOASに納入されたこれらの資料の役割は、SOASにとっては機密資料を含む重要な近代資料の最初の追加になった点であると結論付けることができる。

Scarborough 報告

Scarborough 卿を議長とする、東洋学、スラブ学、アフリカ学についての諮問委員会が1944年

12月に設定され、その報告は1947年に出版された。Scarborough 報告は大きな特別補助金をもたらし、東洋学を大きく発展させた。日本研究は Scarborough 報告の範囲の中では東洋学の一部、特にその中の極東研究の一部として取り扱われていた。極東研究は Scarborough 報告ではほとんど中国研究と日本研究を意味した。SOAS とケンブリッジはその Scarborough 報告により日本研究を発展させたのである。図書館資料についても、SOAS とケンブリッジは、Scarborough 報告の結果、大学補助金委員会より中国語と日本語の書籍購入のためにそれぞれ £5,000 と £6,000 ずつ特別の補助金を受け取った。SOAS の場合、一回限りの補助金 £5,000 が中国語と日本語の書籍を購入するための総費用 £10,000 の半分を満たすために支払われた。SOAS、ケンブリッジそしてオックスフォード大学は、Scarborough 報告では極東研究のセンターと見なされていたが、しかし、オックスフォードは日本語書籍の補助金を一切大学補助金委員会より受け取らなかった。一方、オックスフォードは中国語の書籍のみに £8,000 受け取った。その内訳は £2,000 がボードリアン図書館用、£6,000 が中国学部図書館（現在の東洋研究所図書館）用である。SOAS とケンブリッジ用の補助金の中国語と日本語書籍の間の内訳は、SOAS の場合、£4,000 が日本に関する日本語の書籍用（£2,000 が大学補助金委員会からの補助）、そして多分 £1,000 が中国に関する日本語書籍用である。ケンブリッジの場合、約 £3,500 が日本語書籍のために費やされた。

SOAS は、E. J. W. Simon 中国学教授を中国語と日本語の書籍購入のため1948年から1949年にかけて中国と日本に派遣し、1950年には F. J. Daniels 氏を日本語書籍購入のため日本に派遣した。ケンブリッジは、Haloun 教授を1949年に中国語と日本語の書籍購入のため中国と日本に派遣し、1950年には E. B. Ceadel 氏を日本語書籍購入のため日本に派遣した。戦後における SOAS とケンブリッジの日本研究の進展に平行するように、両大学の日本語書籍購入のための派遣もお互いによく似ていた。たとえば、日本語書籍購入のため最初に出かけた Simon 教授と Haloun 教授は二人共ドイツからの難民であった。二人共中国学の教授であるが、日本語を習得しており、中国研究における日本語書籍の重要性をよく認識していた。また、二人共図書館資料は大変重要であると認識していた。Simon 教授は実際にベルリンで図書館員をしており、また Haloun 教授はゲッティンゲンで図書館資料を構築することに関係した。この二人の中国学の教授に続いて、若い日本学者である F. J. Daniels 氏と E. B. Ceadel 氏が日本語の書籍を購入するために日本に派遣された。この二人は英国の大学における日本学の最初の世代に当たる。F. J. Daniels 氏は後に SOAS の日本学の最初の教授になったし、E. B. Ceadel 氏はケンブリッジの日本学の最初の講師である。Simon 教授と F. J. Daniels 氏が日本語書籍購入のため特別補助金をどのように使ったか、または正確に何冊の日本語書籍を購入したかは不明であるが、Simon 教授と F. J. Daniels 氏が極東に出かけて購入してきた書籍の規模の大きさはおぼろげながら見当が付く。大学補助金委員会の援助により購入したおよそ20,000冊の中国語と日本語の書籍が目録が取られないままになっていると1950年に報告されている。一方、ケンブリッジの場合は、日本で購入された日本語書籍の詳細がわかっている。日本語書籍購入のための補助金 £3,500 の内、Haloun 教授は1949年に £2,500 使い、E. B. Ceadel 氏は1950年に £1,000 使用した。Haloun 教授と E. B. Ceadel 氏は大学補助金委員会の特別補助金を使い、合計で2,543点、13,653冊の書籍を日本で購入した。SOAS とケンブリッジが1949年と1950年に派遣した図書館購入のミッションにより、英国における近代日本語図書館資料の基礎が築かれたのである。SOAS とケンブリッジ

は1949年と1950年に日本語書籍を購入するため合わせて約 £8,500を費やした。その当時の英国のポンドと日本の円の間の交換率は£1が1,008円であり、その交換率によると、£8,500はおよそ8,568,000円に相当する。1949年と1950年の期間に日本の図書館が図書館資料収集のためにどれだけの金額を費やしたかというデータは簡単には入手できないが、日本の大学図書館の一例として、慶応義塾図書館が1949年と1950年に書籍と雑誌の両方の収集のために費やした金額が、5,190,912円であることは知ることができる。これらの二年間に慶応義塾図書館が和洋の書籍と雑誌の購入のために費やした金額の総額が、ちょうど SOAS とケンブリッジが1949年と1950年に日本語書籍購入のために費やした金額の60%に相当する。そこで、あらためて、SOAS とケンブリッジが日本語書籍購入のためのミッションに費やした補助金の金額がいかに大きかったか、また、その Scarborough 報告の補助金が英国の図書館の近代日本語コレクションの確立にとっていかに重要であったかが理解できるのではないだろうか。